

研究課題：周術期患者に対する効果的かつ継続的な口腔ケア方法の確立

研究者名：大岡貴史^{1,2)}、井上吉登³⁾、小田奈央^{2,4)}、岡松良昌^{2,5)}、弘中祥司^{1,2)}、向井美恵^{1,2)}

所属：1) 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門

2) 昭和大学口腔ケアセンター

3) 神奈川歯科大学成長発達歯科学講座小児歯科学分野

4) 昭和大学歯科病院歯科衛生士室

5) 昭和大学病院歯科

本研究では、急性期病院での口腔衛生管理システムの確立を目的に、手術直後の経口挿管患者における口腔内状態の実態を調査するとともに、多職種と連携した口腔衛生管理によって問題点がどのように改善するかを検討した。

2011年4月から11月までの期間に本学病院集中治療部（以下、ICU）に入院した患者のうち、経口挿管による人工呼吸管理がされており、口腔ケアセンターによる介入が行われた87名を対象とした。ICU入室から1日以内に対象者の口腔内診査を歯科医師が行い、口唇、歯、口腔粘膜、歯肉、舌、口腔乾燥、歯の状態、口臭を3段階で評価した。また、初回評価時に奥舌部を綿棒で擦過し、培地上での *Candida* 属真菌のコロニー数を測定した。

初回評価時の口腔内の問題点を集計した結果、呼吸器疾患の対象者のうち70%に舌の問題があり、舌背表面への白苔の付着、乳頭の消失などが認められた。口唇の異常は脳血管疾患および呼吸器疾患の対象者でそれぞれ23.5%、25%にみられ、赤唇部の乾燥や亀裂、口角炎が多くみられた。一方で、口腔乾燥や歯科治療が必要な歯の異常がある割合は少なかった。また、*Candida* 属真菌が検出された者は呼吸器疾患の対象者で最も多く、循環器疾患の対象者で最も少なかった。*Candida* 属真菌が検出されなかった者と比較した場合、口唇や口腔乾燥、口腔粘膜、舌に問題がある者の割合が有意に高かった。口腔内の問題の経時的変化では、口唇の問題は比較的早期に改善することが多かったが、舌の問題は改善までに長期間を要し、改善がみられないまま介入が終了した例が多かった。

ICU患者の口腔内状態では、口唇の乾燥や潰瘍、舌背面の乾燥や舌苔の付着が多く認められ、経口挿管によって開口状態が保持されること、挿管チューブによって口腔清掃が物理的に阻害されうることなどが主な理由と考えられた。また、口腔内の日和見菌である *Candida* が検出された対象者では、これらの問題点が生じる可能性が高くなることが示唆された。これらから、歯垢や食渣、分泌物をはじめとした視認できる汚染物の除去のみならず、口腔内の細菌状況を考慮することでより効果的な口腔衛生状態の管理ができるものと推察された。